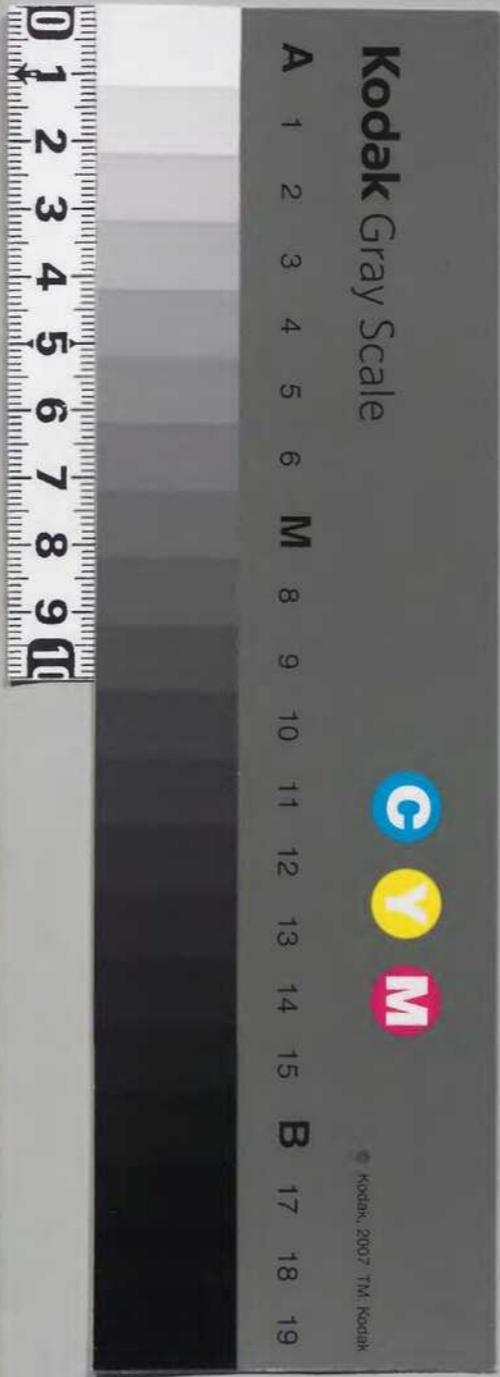


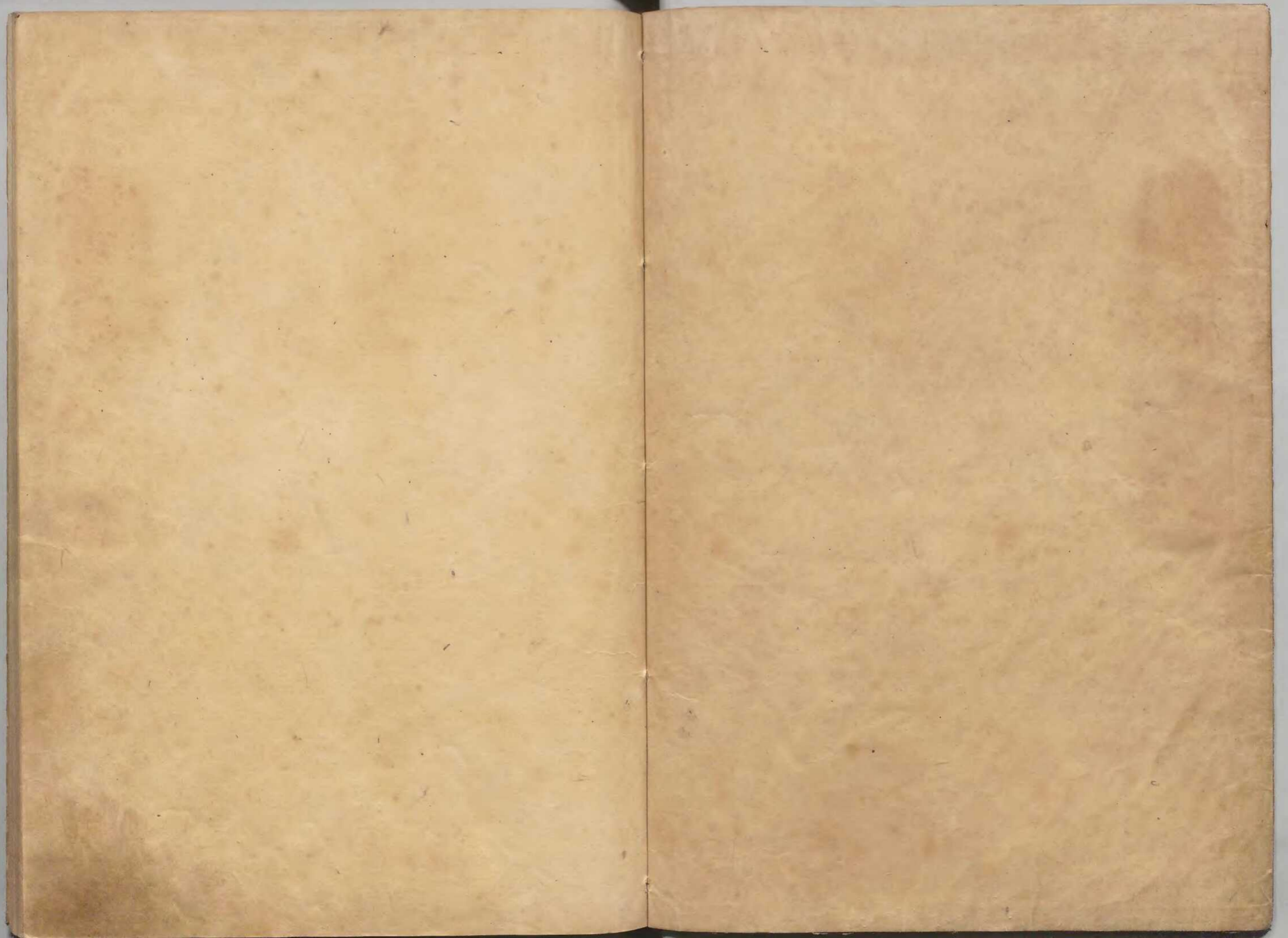
116

寛永諸家譜

支流 藤原氏全廿五冊之内三

内閣文庫	
番號	和 20199
冊數	186 (116)
函號	76 1





丹羽

兼松

松浪

松倉

石堂

松崎

松風

松村

寛永諸家系圖傳

藤原氏

矣二

文流

丹羽

長政

修理亮 尾列 兎玉村の人なり

先祖を武列 兎玉堂 中年より

尾列より 平姓なり 故

淺草文庫

藤原氏より投世武衛よつとく
切つり 法名 禪堂

長忠

将監 兎玉の人なり

少年より武衛よつとく 子也

長秀

人部 右衛門尉

少若子代

兎玉の人なり

天文十九年長秀十八歳ありて
織田信長とを約し領比治とて
加信あり信長姪女とありて長秀

一書あり

永禄六年信長江列依く本とて
成の軍謀とありてりて
同十一年諸將ことりて江列其作
の城とせりやうふ

日十二子信將の女司居城大河内と

さあ〜と道と抜

えええ〜の浅井俊成守長政信長

〜と〜と〜と〜と〜と長秀と〜と〜と

浅井が家臣破神丹波守と依和守

と〜と〜と〜と〜と

日二子浅井と新倉義宗と〜と

〜と〜とあんなに敵と〜と〜と

信長と〜と〜と〜と〜と信長野田

福満と〜と〜と〜と〜とに列大津

浅さ坂中とせじ叔向のあひさ合戦

敵と〜と〜と〜と〜と勝負

尖せは長秀と〜と〜と〜と大津

〜と〜と〜とに列の國賊路と〜と

ぎら〜と〜と〜と〜と長秀賊徒

余人と討捕ぬ又新倉が指新田

城と攻め〜と新倉流踏つ〜と和

と〜と〜と〜と越あよかつ〜と浅井と又
小治よかつ

同日三多破丹波守清長とてあつて
依和山五万石の地と長秀より討つ
信長が命と仰しつゝ長秀軍
切ありのついでに新倉が所持の本指と
し意と清長は後井も又志滅ぬ
天正三年長秀の一揆と討
又將軍義昭信長と不和より
義昭が外中流とつらそをまふ
長秀は討つとつらそを攻め

同日二多より長秀没る
同日三年長原が陣より一方向
つらそ
同日四多信長惟任氏とつらそ
姓とつらそ平氏とつらそ
同日五多荒木村守信長よつらそ
長秀は討つとつらそ
同日十年藏田信澄とつらそ大坂
乃城代とつらそ

日年六月二日明智光秀信長
我と長秀義兵と殺し明智を
誅さんとて毒いりいするとい
と信長とてりからひるふ
この間くともく城りく己之七
信孝と謀るい信澄の智
かじこたの急りこれと
て城とまりふ一とく印
り信澄の居とら干焚樽とす

屋づり信澄自害とく一とく
河とくり栲列とく伊丹の
賊とくいげ尾崎とく
秀吉とくいゆ
日月十乃山崎合戦よはの明智と
謀とくい長秀と秀吉と
まじらるとしすふとく
交盟いよくか秀吉と同清次よ
しりしき信忠の嫡子とく福ん

柴田池田もあつてくつお議
いふ孫君幼雅のあひごの家
口人うらんとむらうらう
とあつて政務ときくゆへ
關白と割て四万勲功の輩
う海もふるゆへとて柴田播磨
秀吉として記録とけくら
こねとてと長秀り若狭一玉は列
志賀高橋の二郡とて海り大津

居るに水の兵とくくつお議
秀吉と柴田と雄とけくら
く自玉とやうらうは秀吉は
り一教白一教千取の要客を
海へ合弟美濃守秀吉とて大將
として政おのあつて長秀
又海津口とあつて長秀と大將
として海津りあひま
日十一年二月柴田三万余騎を

率一々中河内よそ依久る
玄蕃元一々中川源兵衛が
要害とせめ屋あつし中川に
とひて死せともよ長秀兵衛を
飛一余吾浦一はさそそ之平
余騎湖あしの行よ陣とら秀吉
大垣一ありてこれときついで
馳て夜一入本町の城一はく
長秀と相物一ゆり我と決しと一

こなり玄蕃元をきく廣場よ
いでとらとらと夜も一
兵と一て中河内よそ依久る
とらと長秀が陣暗夜一おあふ
て前と夜後と衝とら秀吉拂曉
一と中河内よそ依久る
と槍とゆとゆ玄蕃元兄弟原
不破等とらとらとらとらとら
とらとらとらとらとらとらとら

聖と仰ふは利とくく言著元が
惣軍敗走と柴田と又ういふ事
あつらんといふ事とて
の味をまらざる秀吉長秀大軍
といふ事とていふ事とせめりこじ
翌日勝家自害一越列即討
平均と長秀勝家の子孫とていふ
一依久る言著元と膚これ
をいふ事とていふ事とていふ事と

越前若狭加賀半玉とていふ事と
一いふ事と

同十三日四月十六日五十一歳に
卒とて 法名宗徳

秀重

九兵衛尉

長宗一子一子

元和元年大坂陣の時平定に
いふ事とていふ事と

女子

松原伊賀守が妻

女子

大津傳十郎が妻

長重

少名鎚 二郎左衛門尉 加賀守

元龜二年 信濃列波早よりまき江

列依和山よりつる十二果乃とさ

江列坂なり居し秀右の命とあり

て信長の息女と娶

天正十一年 柴田と合戦し長秀と

ありし功あり長秀越前守り

何れ長重不意に湯つ尉と号し越前

府中の城より居し

日十三日長秀率し家督とつぐ

日十四日約はり何れ

日多秀右依り内務物と征伐のこ

長重が先陣の士卒軍法を
犯す者大なり、かりて越前加賀
とのぞく

日十又年秀吉統率を殺すの時
長重より相模の士卒又軍法を
そしり秀吉いよくいりてあはれ
と除加列相任とあはれ
文禄四年加列小松十二万石の領地
とあり、二十又歳参議り

任じ、位に叙し兼加賀守
長重の年お前守利勝

東照大権現の命よりして長重と
利勝を隣地よりとつて、あは
しむ和あり長重 嚴命とけ
うほりり、ゆるしむ乃境を
塞すに、い

大権現長重の沙眼をくづり、
日五年、同原合戦の時、前田利勝

長と教して小松のを色とくし
長平後井繩子よとひくうてふ
町り二千歳なり
日六年江戸よ下向一芝の色小
島居と

日八年

名徳院殿先手の四約と思石一旦の款
射と取ゆるされあつて常列
右後りよひく領地一百石と給り

日十九日大坂陣より修書と

元和六年一萬石の領地と加へ
日八年右後とつて奥列棚倉
一とひくく五万石の地と
寛永四年棚倉とあつて白川小
をひくく十萬石の地と

日十四日同二月六日江戸よとひて
六十七歳少く卒と 法名淨英

長正

後中守 早世

秀吉

秀吉

藤吉之丞内少将

くどめりる大和入納言秀長其子と

なれのらゆありて秀吉の命よ

ちるひ坂守和泉守其子とあり

ていり塔列小居と

直政

蜂屋茂後守 早世

蜂屋本羽守其子とあり

長俊

長門守

名瀬院殿よつとくまら

長次

近江

長八守りてあり

名徳院殿よりつとくまら

日十九多之和之太坂あな

の清陣より信をよ

元和二年御代千石と御ら

日又年清上洛の信をよ

伏見よりよひくおと二年又歳

女子

赤田隼人正が書

女子

粟屋越中守が書

女子

稻葉彦六郎が書
民部少輔の母

女子

青山修理亮が書

女子

右田大膳大史が書

長名

三右衛門尉

元和六年長名六歳少くも七次がま

跡つぎ千石とへぬらん

寛永十四年より出書院書とほむ

長和

六右衛門尉

家紋

遠梅菱捲摺

光重

在京亮 武苑の戸よまら

寛永十一年

將軍家沙諱のまるとへぬらん 位下

子叙一在京亮よ何ぞ

日十四年父が家督とほわらん 白川

居何ぞ

同十九年十二月廿九日從五位下叙
左京大夫任伊弉

女子

酒井下總守書

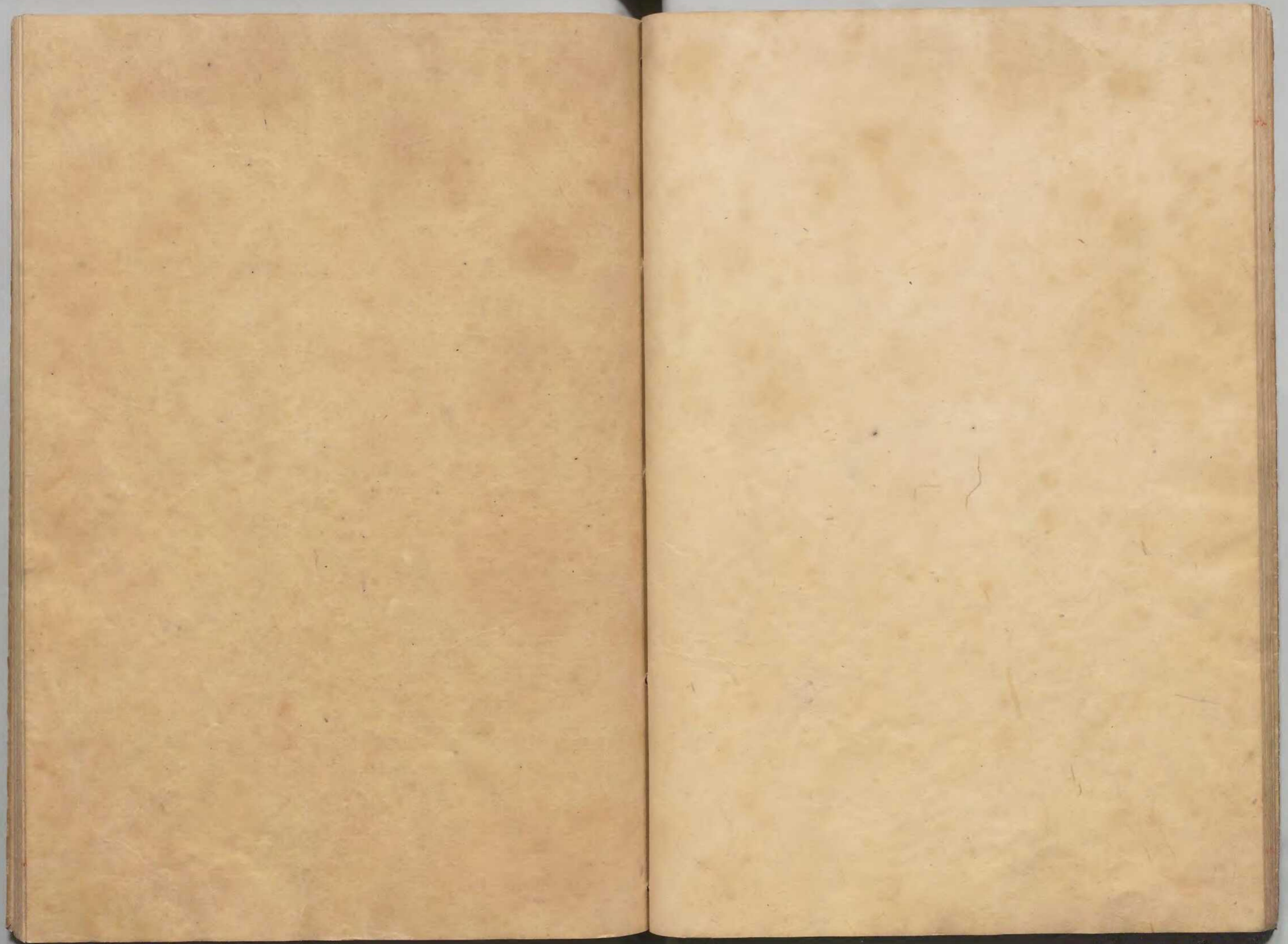
女子

大瀧藏人書 早世

女子

後醍醐天皇書

家級書 之葉書 之代書 遠持



兼子松村

●
秀清ひできよ

長清尉 生國尾張

藏と回こ信のぶ長のぶの伯と父が藏と回こ右の郎の左の尉の

属しよ——く志しどく軍ぐん切きりあり

長ちやう二に子し一いつ子し一いつ死しと 法はふ名な秀しゆ清けい

正吉

又甲郎 後修理亮と号す

生國曰前

くづめを藏回信長よりつゝて三百

貫と銘す

永禄十一の信長に別荘作の地を

せしむるとも坪内嘉右衛門利定を以て

正吉と号せり

元龜元年の影光佐大坂築城の

中より野田の守り甲

士數十人がつゝ信長にせり

し急よ池をせしとせしり乃

らき正吉又徳士と号せり

く敵陣より入力戦く甲士一

人とうらとら

天正元年の越前とを以てのうひ力振

山一戦の別正吉と号す

款糸といひそのかひ疵をかうると
いへともほわたりその首をわたり
信長より款ど信長共切と感
正名よりほげくいへく正名が
勇いまよりくくむむといへご
と今日を結り法士よりくく
をりわたりとれりらち短鞋と
正名よりくくまよりくくいへくこれ
亦着多しわち刀杖鞘よかけ軍

中より取柄の短鞋なり今故り
よりちく軍切と責むとなり
正名とわたりよりこのくく正名鞋と
著るふゆいふくく正名款どり
このくくの款首と前波氏よりちめ
ちくくその姓名とくく前波がくく
これ物倉家来の軍物中村を在る
が首なり中村首とくくくくく
を物倉城とくくくくく人の

尾列比良郷よとひく依、平太夫
父れ備言と結ぶるのときこふり
属しるりのむかへし正名と又依、氏
と四好ありかきかゆし依、之
こもよ取むうしに伎地とうい
これと惣とまき共備言のよありと
その誰とのしをりいれよらて
備言れ物とまきこらとく門外乃橋
と破換してまらとまきぬえしを

わらとりあきく追来しんめい通海
を絶んをあなりあらしはよ提士一人
とこれとまきこら成をまきけんごら
旅人の中より正名一人とら一人
橋とまきこらて伎地しつらこれ
とこすけくかアらまら
日十年信長を能ちりてをい
自殺の言正名を江列安太り
ア〜りの誰しあらむとら

織田信雄よりつとく八百石の地と
領

日十二日長久の合戦の時と云
正成父子をして小牧より居せし
ころより尾列一宮城のつとより
屋敷より一の街談巻説
正成この名をとりて西尾隠波守
より名をとりてつとくより
東照大権現よりつとくより

くはれとくひをまふかきしよ
款としてをとりてつとく
りつとくは感とかりしよ
そのつとくは秀吉よりつとく
群士の初業りつとくつとく
えつとくびつとく英魂とけしつとく
正成とく軍中とくげつとく
そのえつとくびつとくつとく
現れ負つとくつとく領地千石と

うへふ秀吉薨^こりて後かか^りの
肥前守利貞と

大権現不和の事ありて秀吉は
くしめく

大権現の魔ト^りり属^しりり^の七人
正吉とりの一なり

を去る年京橋沙^ら返^らり
大権現奥列法が馬のやうに
名^を呼^ぶ

りてさるひくくすけ

日多岡原陣のさき正吉徳列
の案内者ともなりし

大権現の釣合をうけし法が
いふよ江戸を法列改^める

ふのとき款城し甲卒とわ
河とるてとを拒^むる

一柳監物とをむらに河田と法が
款敗^れしてさるの法津田

飯^をら即^ちとるの殿と正吉は

をひくこれと追津田と祠とつて
しじりの形勝せしこれと英
談とつてのしき首級とつて
園原開陣の故

大権現の台命とつけし海より下地
忠告をとりつたこれ忠告をとり
申請をゆかりのしる来比
二千六百石と領と忠告をとり
このら又 台命とつけし海より

尾張大納言義直卿よりしる
長十九日えわえ日坂あ夜の
中陣に義直の旗下よりあや

寛永四年九月八日八十六歳にして
死す 法名英云 道号一箇

正勝

右衛門尉 生國同前
行歩不自由なりし仕官をやめ

て執居と

寛永二年八月廿七日六十四歳にして

死す 法名道祐

正成

又八郎 後源長清尉と号して生玉

日前

十八歳ありて信長より了ふ

天正十年信長自殺の時尾列

清原よりありてその難よありと

そのうち藏田三七信孝より了ふ

二百貫の比成領と後信雄より

了ふ四百石と領と

日十二年長久平合戦の時八月

晦日尾列岩倉路よりをひく

大権現信雄より命ありての

まじく尾列遠村を正成正成を居

るといふなりと志しれむとてけ取

を備りてしるすこの旨

寛永二十三年 食禄二百石とあり

同六年

名徳院殿より修入とあり

同年其田陣のとき修入と

ありとありのち 釣合とあり

とありり大書の記取とあり

同七年領地二百石とくくあり

同十九年大坂沙陣のときあり

使者とならるる記取とあり

翌年沙陣のとき天皇とあり

をひく首級とあり

元和二年 釣合よりありて義直と

ありつゝ一又正名が来地二千石とあり

と領分六百石を正成が才又とあり

よとあり

寛永十七年九月廿二日七十八歳と

ありとあり 法名石切 道号忠屋

正行

之右部 生玉回あ

藏回佐雄 一尾列重右村

一十八歳少て討死

正廣

又兵衛尉 生回同前

義直御 一足将とけり

女子

依分利七郎右衛門尉清重が妻
清重が依分利小右次清政が次男あり

女子

徳永全兵衛尉秀親が妻

秀親が徳永右郎兵衛尉捕秀が長子

なると清重因幡守より父捕秀を

藏回佐長より人に列伊庭と領と

女子

兼松保又右衛門尉正重が妻

女子

津田新十郎政盛が妻

政盛を尾列岩倉の城を織田信勝が

信安が末子なり

正尾

又富師 氏列 江戸よき

母を築原傳右衛門尉が女

元和元年

名徳院殿とあり

日二年父正成義をとりしはくはく
尾成尾列よりうけたりなり

正尾を

名徳院殿よりつとむるなり

父正成が家比七百石を領す

日八年 作とありしは清書院

書とありし

寛永九年

將軍家より福とありしは

女子

同十年領地二百石とくは
同十又年五月八日 釣合とけ
ふりり歩行の路となら
翌年十二月晦日 伯り
布衣と着と

正業

源兵衛尉 生國尾法

正方

義直郷一つとく父正成の
二千石とくは

与一郎 生國尾

津田新十郎とやあいて
子とくはかへり平姓と
なり

正長

又八郎 生國尾

女子

石見初代守時正の妻

時正と石見作兵衛尉時清の長子

なりと父子ともり義直つり

了

来

右郎右 生國同家

女子

山本権之依色總が妻

女子

正春

孫三郎 茂就江戸よき

母右衛門石見守正の妻の女

寛永十七年二月十一日

お軍家とねーくまら

正直

赤坂の御所 生國尾張

長十之丞

名徳院殿と申す

日十又の 作す

つとむ

日十九の 大坂陣のとき
之水正が 陣して 江戸 法成

書とけし 聖なる陣のとき

名なる 陣のとき

又月七日 天馬のとき

之水正 陣のとき

急す 陣のとき

下池の 陣のとき

その 陣のとき

と 陣のとき

款の 陣のとき

日十三年四月十六日 右令とくうしり
沙目付となしり五の字の差物と
うれ

日十二年十二月十四日 銀比十石を
くつへはりり 都合千六百石を領
知

日十四年三月十一日 右の邦後肥前
の五箇所の蔵より 楮券一摺と
起とのとさ 上使とくう日十

二月廿六日子の別 江戸とちく聖
正月廿七子の刻 故地より 着日八日
中の別々の地を 右日月十九日 成の
刻 江戸より 海老より 故地の事
と 江戸より 海老より 故地の事

ちく 外沙と海を びり 日光社
糸の係事あり いる 伏見大坂沙城
番あり いる 國々 沙使あり いる 沙
菅 徳なり びり 江戸 勤仕の事

松波

● 重總

重隆

右衛門尉 生國山城

文祿元年十二月十日從父位下

叙一但守一何

東照大権現よりつるつるつる

長久平十一年八月十日八十二歳

卒

重正

権平 生國冬河

大権現よりつるつるつる

元龜二年を列之方原の沙陣

信をよこされしつるつる沙使とけ

を海より武田伝言よりつる信玄

國行の口とつる

天正三年長瀬我場よりつる

首級をとつる

長久平小田原本の每陣おとす

語約

文禄元年高松陣の時病

かり信をよこつる

日多八月十日軍八歳よりつる死

重次

梶平 六苑 生國回前

物鮮陣のとき名護屋よとひて

大指現より形瑞ししきまひり

見重正が志詔とし海ふそのら

台徳院殿よりしきまひり

真田陣大坂陣は信重とつとむは

將軍家よりしきまひり

寛永十七年三月あつ七十八歳

去る死

重種

少将兵衛尉 生國武苑

將軍家よりしきまひり

重信

源兵衛尉 生國回前

寛永十六年七月十八日

將軍家ノ御瑞ノ

重宗

九兵衛尉 生國曰

將軍家ノ

家紋

松浪

● 勝直

平右衛門尉 生國尾治

藏回信長曰信雄

天正十八年小田原陣の故

東照大権現

享長十二年九月六十七歳

死に 法名浄心

勝安

二郎右衛門尉 生國曰あ

勝安十六歳のときさくら下りく

大権現より 三つさくらまのら

名徳院殿

將軍家より 三つさくらまのら

勝安

平右衛門尉 生國曰あ

大権現

名徳院殿

將軍家より 三つさくらまのら

寛永七年七月軍二歳にりて死に

法名浄心

政俊

平右衛門尉

長十郎より 三つさくらまのら

名徳院殿より賜しつゝまのり後
將軍家よりつゝまのり

政治

市平 生國武苑

寛永十二年八月二十一日

將軍家よりお賜しつゝまのり

日十八年二月十六日より大沙番を

しつゝ

勝重

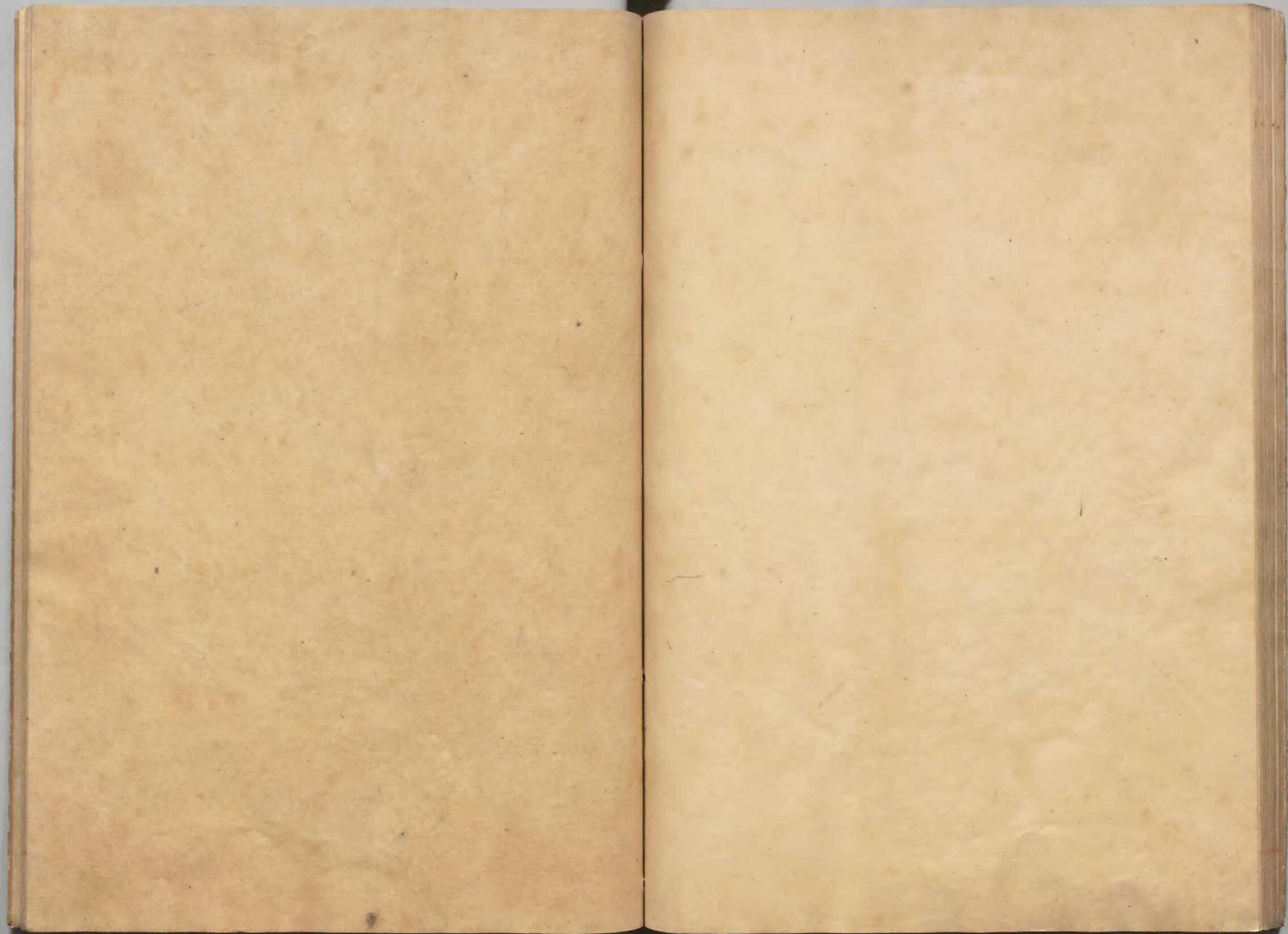
平右衛門尉 生國後河

寛永四年十一月十日より

將軍家よりつゝまのり

日七年 嚴命ありて勝重がきつ

家紋 凡内簾



● 某

松倉

右馬助

本國大和

筒井 次慶 了

重信

右近

生國門前

順慶より信濃へ食邑貳千五百石と
領し和列結崎の城より信濃へ後
食禄と加倍し同五知城より
あり又貳千石をくると高取の城
在信濃そのうち約合八千二百石と
領知し伊賀名張の城とあり
けうそき長秀吉朱下とあり
重信よりて角井伊松久より属
し

文禄二年七月七日二十六歳に
あり 信名安次

重次

十右衛門尉 生國曰あ 信名西居
尾列より下野守忠吉より
信濃そのうちあり

東照大権現

名徳院殿より信濃よりあり

重次痛氣^{いんき}よりしり領^{りやう}知^ちと^とあけ
 してふいふるきの旨^旨と井^い大^{だい}炊^しは
 してと^とと^とといふと^とと^と 歳^{さい}命^{めい}
 一^一の家^け督^{とく}と^と重^{じゆう}名^なよりしりし^しせ
 重^{じゆう}次^じ名^なよりしりし^しけ^けし^し京^{きやう}始^し大^{だい}坂^{さか}場^ばの
 色^{いろ}よりし^しを^をひく^{ひく}病^{びやう}才^{さい}保^ほ書^{しよ}と^とと^と
 の旨^旨 上^{じやう}意^いと^とと^とあり

重名

甚^た長^{ちやう}末^ま尉^{ゑい} 生^{なま}國^{くに}尾^お張^{ちやう}清^{せい}頃^{ころ}

名徳院殿よりしりし^しを^をひく^{ひく}才^{さい}保^ほ書^{しよ}と^とと^と

板^{いた}倉^{くら}内^{うち}膳^{だん}正^{せい}重^{じゆう}昌^{ちやう}か^か組^{ぐみ}よりしりし^し

沙^さ書^{しよ}院^{いん}書^{しよ}と^とし^しと^との^のち

乃^の軍^{ぐん}家^けよりしりし^しを^をひく^{ひく}才^{さい}保^ほ書^{しよ}と^とと^と

家紋 九曜



● 某

石 卷

下 野

生 國 相 換

小 條 氏 政 了

康 敬

下 野

生 玉 同 矣

小原氏を討つる
と正十八日小田原いよいよ落居せし
ふとき氏を討つ使臣とて京
都入りのがりて秀吉より海軍
秀吉はしるく康毅とてめし海軍
入りしりて小田原落城の時とて京
都より下玉とてまゝ伊豆五三枚橋
しるくしめしりてとてとてこの
とき秀吉

東照大権現よりしげくこれをいげけ
らふ

大権現岡東津入玉のとき康毅を多
依後守とてしりてかされしりて
しるくしりて

享長十九年十月八十歳よりとて
死す 法名幻庵

敬重

右子允

生國相換

大控規

右德院殿

二十歳少く死す

法名少少

康貞

右右衛門尉

生五十五歳少

右德院殿

右軍家より了る

康元

八郎右衛門尉

生五十五歳

寛永十二年

右軍家より了る

康正

右右衛門尉

生國相換

台座院殿

將軍家

家紋

二鶴

● 集

松^{らう}濟^{じき}

集

之右集の射 生國^か之^か河

東照大権現よつてくまのふ

某

檢七郎 生國同前

大檢現一

台次

檢正侍所尉 生國同前

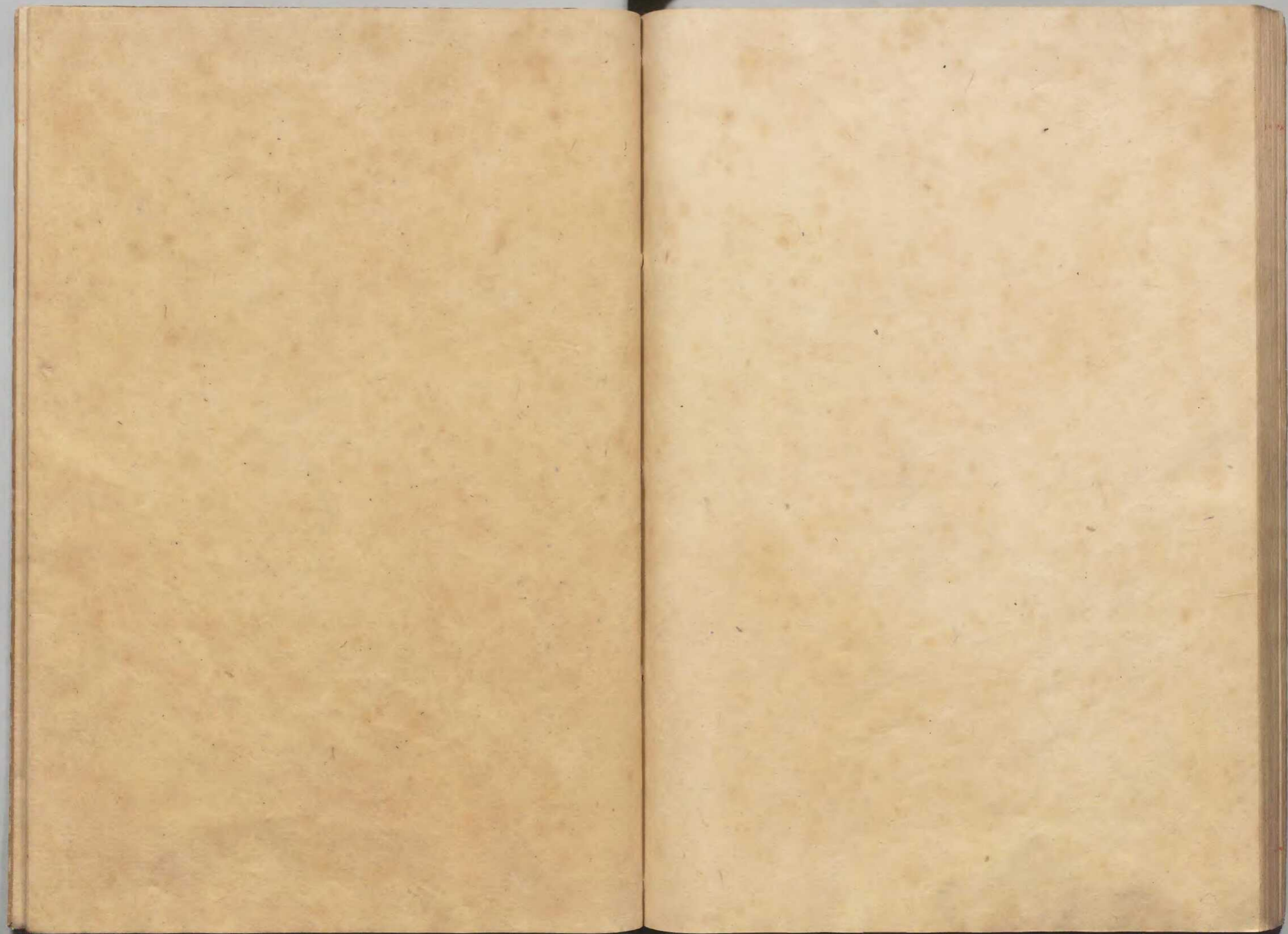
檢正侍所尉 生國同前

寛永十二年

將軍家よりしるす日十五年

より沙小姓組の書と云ふ

家紋 之形也



正廣 ひろ

助兵衛尉 生國 くに 江 え 法名 ほりな 良勝 りょうしょう

大権現

台徳院殿

將軍家 しんげんけ

正忠 ちゅう

権右衛門尉 生玉 なまたま 同 どう 家 け

大権現

台徳院殿

將軍家 しんげんけ

正成 せいせい

十右衛門尉 生國 くに 武 ぶ 家 け

將軍家 しんげんけ

正勝 しょう

侍 し 三郎 ざぶらう 生玉 なまたま 後河 ごがわ

將軍家
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

家紋

三龜甲

● 義村

松村

妻 生 玉 氏 義

氏 別 江戸 山崎 守 子

所 あり あり あり あり あり あり あり あり

加 藤

正 之 氏 流 人 となり 相 する なる 夫 夫

りしにりりて小地と成と
文祿二年八月十一日某にりり
法名某某

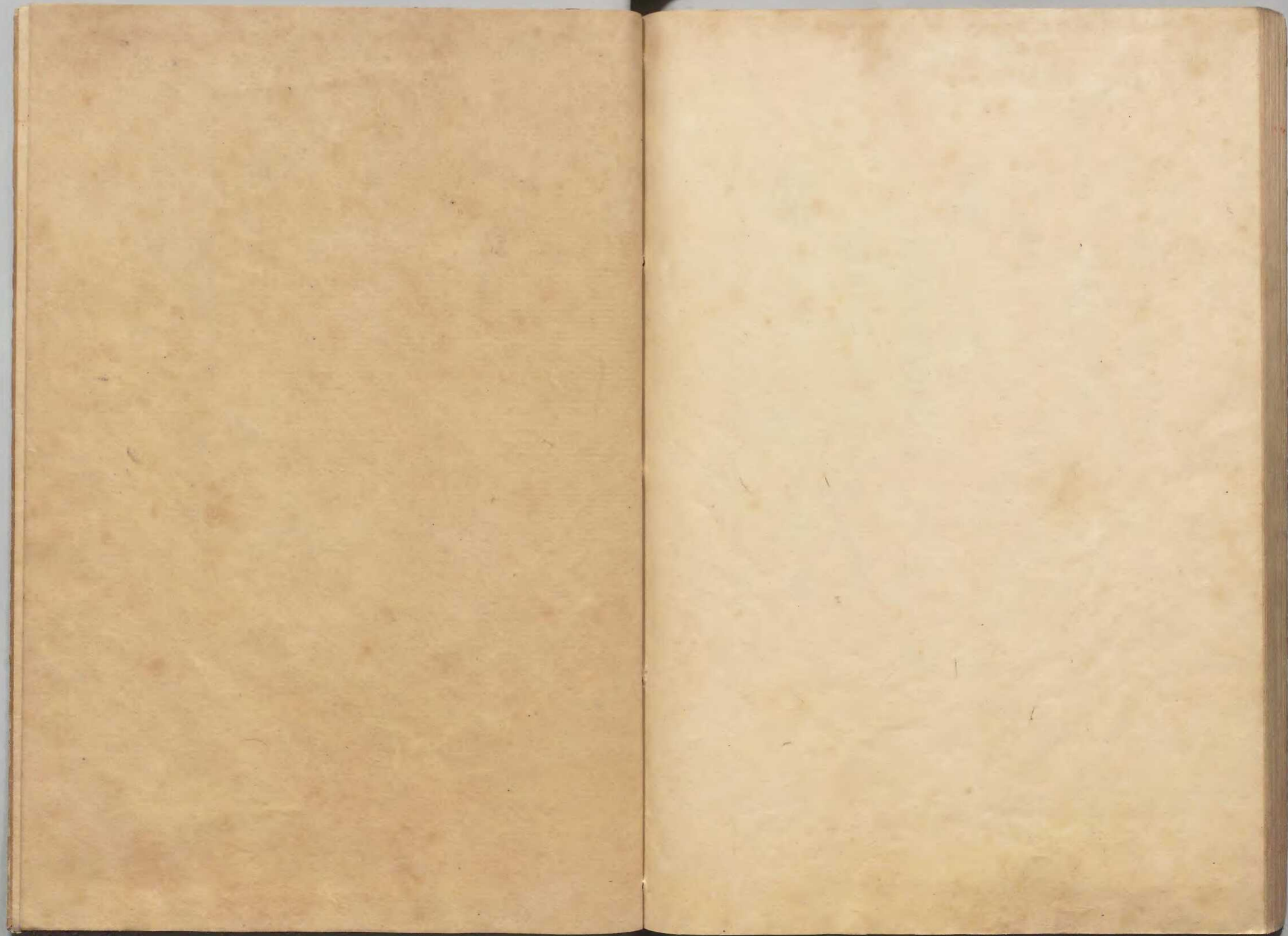
種よ總り

松村を大納言尉 生國同前
浪人となるもさき毒と改めく松村と
号と改紀伊大納言松村宣郷
了

政ま總り

源氏清房尉 生國同前
寛永三十四年
名徳院殿
將軍家より了す

家紋 丸の内よ一柏



● 来

松村

時安

台右邊の村

生國大和

寺長十八

東照大権現

時
並

浄代友職とつとむ
日十九日一死と

名在傳つ尉 生國同前

兄時安死くは 信とがうり

西代友職とつとむ

家紋 竹の丸と飛雀

